

# スポーツ系学生の鳥瞰図および木工作品ものづくり学習

The Studies of Bird's-eye View and Wooden Crafts Work  
by Students of Sport in Hokusho University

水 野 信 太 郎  
MIZUNO Shintaro

## I. はじめに

本稿は昨年度、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第10号に「スポーツ系学生との木工作品・木版画制作の体験学習<sup>1)</sup>」として投稿した拙稿の続報である。前報では“学生との体験学習”と付された主題の通り、筆者も学生たちと共に体験学習を共有するという内容の報告であった。

しかし本年度は結果的に、例年とは少し様相を異にしていた。つまり本稿でレポートを掲げる学年は、学生たちが独自の作品について自身が信じる方法で制作を進めていく傾向が強かった。そのような状況下で、筆者自身は彼らが作品を制作する際には、同じ教室内にいながらも全く別の領域の作品を手掛けるという展開を初めて試みた。具体的には学生諸君が鳥瞰図を制作する横で、筆者ひとりには木版画あるいは大小の木工作品を手早く仕上げるといった状況であった。

このような進め方は学生たちの目には、自分がつくりつつある作品とは別のものを、如何なる方法で完成させるのかという未知の世界を傍らで実際に見聞きすることとなる貴重

な経験となったようである。たしかに紙面と彩色のための画材だけを扱う鳥瞰図を描きつつある学生の間から見れば、多少なりとも力仕事を伴う木工の作業は奇異で異質な世界であったかもしれない。

上記のような環境に励まされたおかげで、筆者は本年度、例年以上に多数の木製品を完成させる結果にこぎつける事ができた。それらの具体的な作品例として、建築界で材木を材軸方向に延長する際、曲げ力や回転力に対して耐えられる有効な継ぎ方である特殊で美しい継ぎ手「いすか継」を試作した(写真-5および6参照)。いすか(鶺鴒あるいは交喙)とは小鳥の一種で、口ばしが上下で噛み合わず左右にずれている鳥である。この食い違った口ばしによって針葉樹などの種子を巧みについでることができるという。いすか継は、その鳥の口ばしの形状に由来する名を付された継ぎ手である。

さらに継ぎ手とは別に仕口(しぐち:材と材を軸線上以外の角度を有して連結させる加工法)の中から、建築学の教科書で目にするだけであった幾種類かの事例:手本を実際に工作する機会に恵まれた。たとえば木部の端

部を加工して長くつくり出した柄（ほぞ）を2段重ねにした天狗ほぞ（天狗の鼻のように長く高い）が一例である（写真-7および8参照）。それだけでなく、くさびを柄の割れ目に仕込んで柄を打ち込むと、尋常な外力では脱げにくくなる「地獄ほぞ」という恐ろしい名称の仕口もある（写真-9および10参照）。これらも学生諸君が講義時間の流れの中で、筆者に与えてくれたものであった。それらだけでなくこの1年間は実利的な木製品をも制作する好機となった。折り畳み式の木製カバン（写真-13ないし15参照）、狭小な住空間で実用可能な玄関わきに置いて使用する棚（写真-16参照）、そして仏壇そのものではないが仏壇の前面に配して設える白木の棚（写真-17参照）ほかである。

そのような筆者の動きが学生たちに何らかの刺激を与えたのであろうか。ものづくり体験学習を継続する中で2番目の作品には、日常生活の場面で実用化が可能な木作品へと触手を伸ばした学生たちも出現した。それらの作品の一例が、コンパクト・ディスクCDを収納しがてら、そのCDのディスプレイも可能な収納ケースである。また一方では、複数のキー・ホルダーを自室内で管理するための鍵類の保管箱に替わる木製作品を制作した学生もいた。後述のレポートを、掲載する写真と共に検証願いたい。

本年度は昨年度と違って、木版画に挑む学生が現れなかった。モチーフとなる題材を思い描くことができなかつたようである。そのような中、筆者ひとりが人物像を制作し続けた。本稿には木版画の学生作品は登場しないが、この一年間で筆者がものした木版画を最後に掲載する。

## Ⅱ. 体験した学生の学習レポート

本年度ものづくり学習を体験した学生自身によるレポートを採録する。記名の体験記であるので基本的に原文をそのまま掲げることとする。しかし明らかに入力ミスであると判断される個所については、筆者の責任で訂正してある。図の1から4番として学生の手による鳥瞰図作品を掲載する。卒業生の未発表作品もあるが、体験学習レポートに関しては本年度の学生分のみを採用する。レポート採録の順は、鳥瞰図制作レポートを先にし、そののちに木作品の制作とする。

### 鳥瞰図

齊藤 瞭太

今回描いた鳥瞰図について、まずは説明しておきたい。鳥瞰図とは地図の技法および図法の一種で、上空から斜めに見下ろしたような形式のものをいう。飛ぶ鳥の目から見たように見える、というのが鳥瞰の語義である。今回のゼミ活動で鳥瞰図を描くまで私は鳥瞰図という言葉も鳥瞰図自体の存在も知らずにいた。このゼミを選んでいなければ、鳥瞰図を知らぬまま社会に出ていたと思う。北翔大学に来て良かったと思うのは、今回のようにスポーツのことだけではなく、様々なことに触れ、学ぶことができるという点である。

鳥瞰図を描く際にまずは大まかな日本を紙いっぱいに描かなくてはならないことから、自分たち独自の日本全図を描いた。今回の鳥瞰図は、現在住んでいるマンションから北翔大学までと、実家から北翔大学までの経路を描くという課題であった。また、北海道や本州、四国、九州の各地域の特産品も調べて描

き入れることから、紙の3分の2を北海道で描き、残りを本州、四国、九州でうめた。だが、ただうめるだけでは紙いっぱいにはならないので、本州の形を曲げたりすることで、大きさを表現し、また個性も出していったと思う。

次に今回の鳥瞰図は、現在住んでいるマンションから北翔大学までと、帰省先の実家から、北翔大学までの経路を描くという課題であることから、まずは現在住んでいるマンションから北翔大学までの経路を写真で撮り、どんな建物があるのか、どんな曲がり角があるのかを調べ、描いていった。次に北翔大学から大麻駅、旭川駅から実家までの経路を調べていった。北翔大学から大麻駅の間は、様々な建物があり、また建物もすぐ変わるため、しっかり調べる必要があり、大変ではあったが様々な発見があって、とても面白かった。旭川駅から実家までの経路は、地元に住む両親からの協力やインターネットを頼りに描くことができた。

次に北海道、本州、四国、九州の特産物を調べ、描いていった。北海道の特産物は自分が道民でもあることから、非常に調べやすく、描くのには苦労しなかった。けれども他の地域は何もわからない状態でのスタートであったため、非常に苦労した。だが結果的には現在受けている公務員試験にとってもよい学びになったため良かった。

最後は色塗りである。色塗りはあまり得意ではないため、苦労したが、自分の想像していた鳥瞰図の作品に少しは近づくことができたと思う。

私は今回鳥瞰図の作品を完成させるにあたって様々な学びを深め、公務員試験に必要なことも学ぶことができた。その一つに地域選

びがある。どんな地域にも必ず個性があり、特産品があることだ。今までの私なら地域だけで就職先を決めていたが、それは間違った考えだと気づく事のできた作品づくりであった。

## 鳥瞰図を書いてみて

笹川 拓巳

今回ゼミの活動で私は鳥瞰図を書きました。活動の中で木工や版画、鳥瞰図などを選択できたのですが見た目に一番簡単で、すぐ終わりそうだったので鳥瞰図を選びました。まず初めに各地の特産品や観光名所などを調べていきました。この調べる作業が何かと一番ためになった気がします。一通り調べ終わったところで、いざ、用紙に絵を描きこんでいくのですが私は絵が苦手なうえ全体のバランスを取ったりするのがとても苦手で、自分の住んでいる北海道でさえ上手く描けませんでした。尚且つ鳥瞰図は特徴ある描き方が多く、絵のセンスがない私にはとても難しかったのです。何とか日本本土を描き終えたのですが、描き終わるまで何回も描いては消してを繰り返し何枚紙を無駄にしたかわかりません。

次に各地の名所などを描き入れていったのですが、この作業はなんだかんだ楽しかったです。調べているうちにあまり耳にしないような地にもしっかりと特産品や名所があり、とても勉強になりました。逆に名所は知っていたのに、その名所の場所がわからないという地もありました。

私たちの住んでいる北海道にもたくさんの特産品や名所があり、さすが北海道だなと感じました。しかし今、その北海道の中でも環境問題で動物の住む場所や環境が悪くなってきていて知床ではカラフトマスやサケ、それ





図1 荒川 誠くんの鳥瞰図作品



図3 笹川拓巳くんの鳥瞰図作品



図2 齊藤瞭太くんの鳥瞰図作品



図4 古畑 充さんの鳥瞰図作品



図5 昭和末年当時を描いた作品





センスが必要だとは思いませんでした。

絵は苦手ですが各地の特産品や人物、名所を調べるのはとても為になり、いい社会勉強になりました。鳥瞰図に色を塗っているとき自分の性格がわかり、これから何事も丁寧にこなしていきたいと思います。完成までに1年くらいかかってしまい鳥瞰図を選んだのを後悔したこともあります。その反面最後までやり切ったという達成感が大きくあります。今回得た知識は今後使えると思うので、忘れずしっかり生かしていきたいと思います。

以上で鳥瞰図の作成体験学習を終えて、こののちは木工作品制作に関する学生レポートに移りたい。同一学年であるので、レポートを掲載する順番は学生番号の順すなわち五十音順とする。

### 後期のゼミ活動を終えて

近藤 雄大

私は今回の後期の水野ゼミで木工品の作成をしました。木工、彫刻（正しくは木版画）、鳥瞰図の中から選ぶことができ、私は木工品の作成を選びました。

最初のゼミ活動は私だけが出席をし、他のみんなは欠席でした。90分丸々マンツーマンで水野先生の話聞き、それぞれの作品の特徴や過去の先輩の作品を詳しく見させていただき、その中でも自分がやってみたく感じたのは木工でした。鳥瞰図にも興味がありましたが、木工の方が作った後の達成感があるかなと思いきや木工にしました。

木工品の何を作ろうか考える時にはすごく悩みました。大きすぎるものや重たいものは作れないだろうということ、なおかつ簡単す

ぎないもので今後の生活の中でも使えるものを作ろうと考えました。そこで私はCDを入れる箱を作ろうと考えました。普段から好きなアーティストのCDをたくさん買い、コレクションとして持っているのですが、置き場などに困っていてCD専用の箱が欲しいと思っていたからです。

作るものが決まると次にサイズや木の素材を決め、水野先生とホームマックへ材料を買に行きました。札幌駅から歩いて10分程度歩き、札幌の道路の歴史の話や雑談をしながら買い物に向かいました。話の中で不動産の話になり、この話はとても興味が湧きました。選んだ木材は薄くて軽くて大きすぎないものを2つ、そして箱の蓋となる部分の木を1つ選びました。ここでは木の1つ1つの種類の違いや特徴などを知ることができ、勉強になりました。針葉樹と広葉樹の違いによる材質の特徴などです。

材料を選び終え、作成に入りました。買ってきた木を私が決めたサイズにのこぎりで1つ1つ切り、蓋を通す溝を彫刻刀で掘りました。彫刻刀で掘る作業は年末年始に家でもやりました。思っていた以上に上手いきき、きれいに掘ることができました。掘った部分と切った部分をやすりで磨き、さらにきれいにしていきます。私は細かい粉やほこりが舞う空間がとても苦手なので細かい木屑が出る作業をすることがとても辛く感じましたが、何とか続けることができました。

次は組み立ての作業に移ります。まずはそれぞれの木の板に爪楊枝を刺して強度を強くするために5箇所ずつ小さい穴を開けていきます。実は木工の作業の中では個人的に一番辛かった作業でした。穴を開ける部分を少し

でもずらしてしまうと木に亀裂が入り、逆に強度が弱くなってしまうため、気持ちを1箇所集中させ、細心の注意を払う必要がありました。計20箇所に穴を開けるため、肩や背中、腰も痛くなりました。ですがなんとか大きなミスをするこもなくきれいに穴を開けることができました。穴を開け終わると遂に接着作業に入ります。それぞれの木のサイズが少しあっていない部分もあったため、ボンドで接着するときは少し緊張しました。1つ1つの辺を慎重に接着させ、先ほど開けた穴に爪楊枝を差し込みます。そして40分程寝かすと見事に接着することができました。余分にあまった爪楊枝をのこぎりで切り落とすと見栄えはほとんど完璧な箱となりました。この時点で私は少し感動しました。ただ、少し木がはみ出している部分やギザギザしている部分があったので仕上げとしてやすりで全体をきれいに削りました。そして遂にCDを入れる箱が完成しました。少し余韻に浸るかと思いきや、水野先生はすぐさま写真撮影に入りました。熱心にカメラを向けてくれていましたが、カメラの調子が悪いのと電池が切れてしまったことにより少し不機嫌そうでした。ピントがなかなか合わず、合うまで何枚も撮り続ける先生のストイックさは、さすがだと思いました。

今回の後期のゼミではまず水野先生に感謝しなければいけないことがたくさんありました。4回も欠席した私に対し春休みに補講として時間をくださり、作業を行う時間を提供してくれたこと。木材を買うときにわざわざ札幌の街まで足を運んでくださったことなどたくさんあります。本当にありがとうございました。また、木工ということで木の材質、

特徴も知ることができ、普段あまり触れることのない木を切って組み立てるという作業においてのいろいろな知識を少しではあります学ぶことができました。今後どこかの場面で今回の講義の内容をぜひ活かしていきたいと感じました。

## フックのついた家

齊藤 瞭太

今回の作品を作るにあたって私が参考にした家は現在祖母が住んでいる家だ。幼い頃からよく通い詰めた思い出深い場所だからこそこの作品を作り、お盆に祖母に会う時に渡したいと思っている。

作成にあたり、まずは1分の1サイズの下書きを完成させ、その長さを参考にどのような長さ、厚みの木材を買うか決め、近くのジョイフルエーカーにむかい板が決まったら、おおまかな長さに切ってもらい、作成しやすい木材にしてもらう。北翔大学に戻ったら板にケガキ線を引き、のこぎりで切っていく。のこぎりには縦曳きと横曳きがあり、木目に沿って切るときには縦引きを使い、木目に対して、直角や斜めに切るときには横曳きを使う。今回作った作品は基本的に直角や斜めで切る作業が多かったため横引きによる作業がとても多かった。またのこぎりは引く時に力をいれ、戻すときには力をいれないことや、板にたいして水平に切ることによってスムーズに切る感覚を得ることができた。またケガキ線の上を切るのではなく少し離すことで最後にヤスリをかけるのでとてもよくなる。

こうして全ての板を切り終わると、全ての木材にヤスリがけを行う。私の今回の作品は窓や煙突などで同じ大きさの物を制作しなく

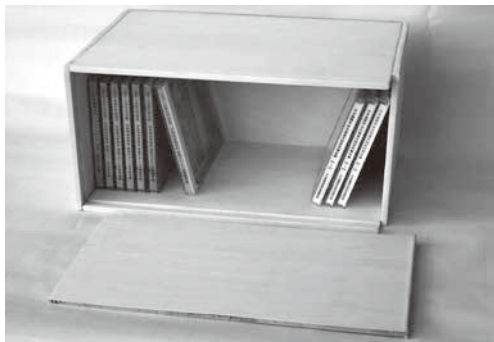


写真1 近藤雄大くんのCDケース



写真5 特殊な継ぎ手「いすか継」

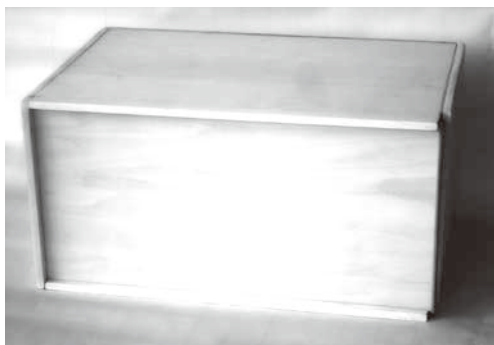


写真2 近藤くんCDケース完成姿

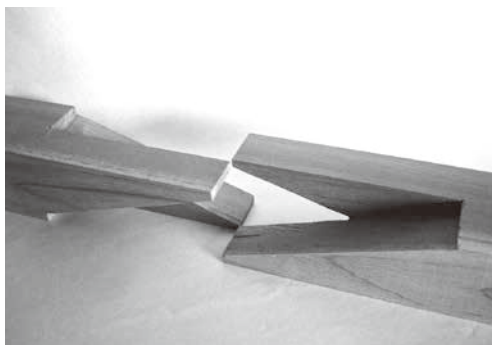


写真6 「いすか継」接合部の詳細



写真3 齊藤くんのキーストッカー

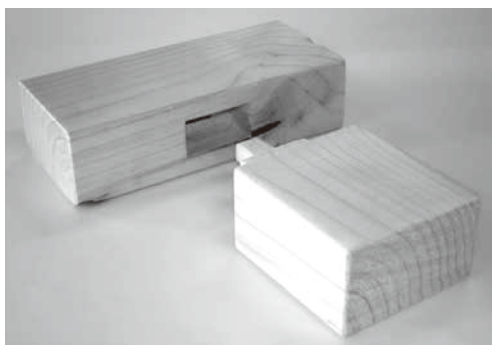


写真7 二段の継ぎ手「天狗ほぞ」



写真4 通常の幅と異なる福倍茶杓



写真8 天狗ほぞを組み終えた全景



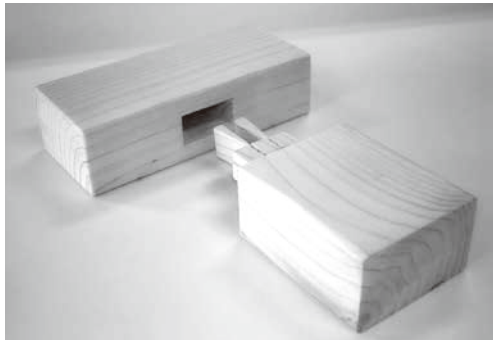


写真9 くさびごと打ち込む継ぎ手



写真13 簡易なトランクとしての靴

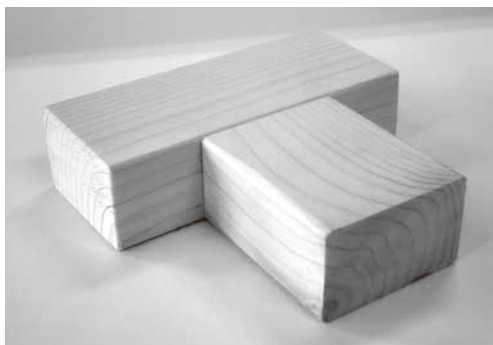


写真10 組むと抜けにくい地獄ほぞ



写真14 舞台での演技用折畳み板靴

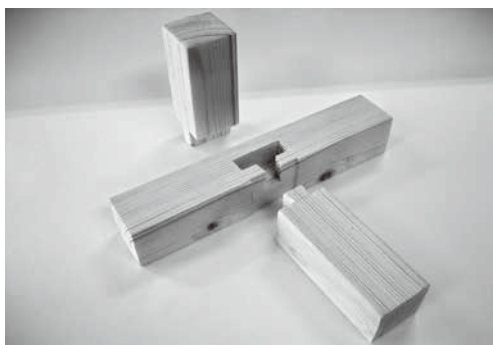


写真11 土台の交差部：あり継と柱



写真15 持ち運びに適した折畳み式



写真12 木造建築の土台と柱脚部分



写真16 集合住宅に用いる玄関脇棚



写真17 「曹洞宗」古式の仏壇前棚



版画2 金沢の東まちを歩く二人旅



版画1 中学を辞して上京する啄木



版画3 九州男児たる面構えの牧水

てはならない場面が多々あったので、同じ大きさの物は材料をそろえて一緒に持ちながら同時にヤスリがけを行った。

ヤスリがけも終わると組み立ての作業に入る。組み立てるときにただボンドでつけるだけでは今回作成した家の庭にあたる部分やそれを抑える部分、また屋根が落ちてしまうので板に四つ目きりを使い、穴を開け、そこに

爪楊枝を通して固定する作業を行った。それにより固定され動なくなる仕組みである。組み立てていくなかで若干ではあったが大きさが違うものがあったり、上手くはまらないものもあった。そのたびにヤスリで削る作業を行う。木材を使う作業は中学校以来であったが難しさとともに面白さがあり、非常に良い経験ができた。組み立てができると最後に

窓に色を塗り、完成である。

今回作った作品で一番悔いが残ってしまったのは保管方法である。組み立てができたときには口が開いていないとてもよい状態であったが、保管方法に誤りがあり、板の力が上にかかってしまい完全に口が開いた状態になってしまった。だが、北翔大学にきて、スポーツのことだけでなく、様々な体験をさせてもらうことができ、非常に良い経験となった。この経験も活かしながら良い社会人になれるように就職活動を頑張っていきたい。

### Ⅲ. 学習の狙い

学生たちに鳥瞰図の制作を課題として提示する意義は、足元を真剣に見つめるという行為をしてもらいたいからである。図なり絵なりに描き出すためには、実は詳細に観察しなければならない。現実には自宅から本学までの道案内として実用に供する事ができるためには、交差点の数、信号機の位置、市街地の景観、公的機関などを正確に落とし込まねばならない。そのためには実際に都市空間を歩いてスケッチするなり写真に撮るなりする必要がある。そのような行為そのものを実施してもらいたいのである。あるいは現地踏査に及ぶことはなくとも、全国各地の特産品、名所、旧跡、行事、人物ほかを正確に認識することは他所の事ではない。自分の足元においても、より良いまちづくりを実践していく際の有力な示唆となろう。

その意味では毎年、専門演習Ⅰという授業で「えべつやきもの市」という道内最大の陶器市に際して実働活動を続けているのであるが、鳥瞰図の画面にえがき込んでいる学生

は少ない。真のねらいに気づくまでには至っていないようだ。大学を巣立って社会において生活する中で初めて地域社会への愛情が芽生えるものなのかもしれない。

もうひとつの理由も考えられる。それは鳥瞰図作成の課題が後学期であることに原因を求めることができそうだ。学生諸君にとっては、前学期に終えた体験学習の記憶が薄らいでいる可能性が大きい。

地域への思い入れと責任感の自覚にどれほど役立ったか否かは不明であるが、筆者がこれまで学生諸君に見せてきた自作鳥瞰図を図の5から8に掲げた。それらには当時居住していた地域や遠い記憶の領域あるいは反対に想像もつと言えれば夢とも呼ぶべき分野さらに空間的な広がりとしては世界地図までを描き出してある。これらの作例が、今後のより良い地域振興への原動力となればと願っている。

また木材あるいは材木という素材を扱いきるための体験学習は、必ずしも職業的な教育とは限らない。つまり木材加工のプロになる者だけが体験すれば良いのではない。むしろ全く逆で、社会に出る前の万人に学習の機会がおとずれることが好ましいプログラムなのだ。

現代社会は「技術」が縁遠くなっている時代である。ものづくり大国ニッポンでありながら、大半の国民は材料から品物をつくりだすという工程から遠ざけられているのである。その結果、製品の製造作業に触れる機会が極端に少ない。それでいて商品は十二分に溢れている。現代社会にひそむチグハグさだ。

このような状況下では、ものづくりどころか修理という行為の余地さえもが非常に狭められる。身のまわりの品を自分で直して使い



続けることが不可能なのである。そのような現代社会の陰、負の側面を実感するための行為が必要であろう。このねらいから当研究室では、たたら製鉄や砂からガラスを焼成する活動の試みをしてきた。青年が素材・材料や商品を購入するだけではなく、自分たちの手で一からつくり出すのである。ひ弱な現代人からの脱却が望まれる。

わたくしどもにとって最も身近で扱いやすい素材は紙である。この画面には鳥瞰図を描くことができる。紙に次いで加工しやすい材料が材木である。板材に凹凸面を構成し、その痕跡を紙面に写しとる。これが木版画である。加えて木材（ログ・ハウスのログ：丸太）を製材した材木（ランバーまたはティンバー：板材と角材）を刻み、組み立てることで木工作品を形成することができるのである。

鳥瞰図と木製品については前述した。木版画作品としては、本稿では筆者作の石川啄木（版画－1参照）、若山牧水（版画－3参照）そして義母と義弟の姿（版画－2参照）を掲載するのみにとどまった。本年度に限ってであるが残念ながら、木版画の学生作品は制作されなかった。

#### IV. むすび

以上、学生たちの体験レポートの採録と並行して、ものづくり学習のねらいをも披歴した。本年度の卒業生は例年以上に学習時間を費やして、学生によっては複数の作品を完成した。わたくし自身も自由な時間配分が許されて多様な作品をものすることができた。教科書の上でだけ学んでいたような領域にまで、はじめて足を踏み入れることができた。それ

らが建築部材の継ぎ手や仕口ほかであった。

わたくし自身、理論の上では理解することができていても、実際に制作してみると理屈通りに完成しない作品の何と多いことであろうかという事実を痛感した。学生さんたちと競うようにして、学生たちから監視されることで、どうにか形として仕上げることでできた作品も多い。本年度の学生だけに限らず、歴代の卒業生たちから直接、間接的に教えられた事がらの多さに改めて感謝申し上げる。

当体験学習を継続し、本稿をまとめるに際して、137教室の美術室あるいは雅館1階工房の版画室を使用させて頂いた。教育文化学部教育学科ならびに同学部芸術学科の美術系諸先生へ深甚なる感謝を申し上げる次第です。

#### 注

- 1) 拙稿：「スポーツ系学生との木工作品・木版画制作の体験学習」、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要10. 63-74, 2018.